

Q

大人になってからのおたふくかぜ。 不妊などのリスクがある？

34歳、男性。夫婦とも、子どものころおたふくかぜにかかりませんでした。大人になってからかかると重症化したり、不妊になるリスクがあると聞きます。近い将来、子どもがほしいと思っっていますが、大人になってかかるとどのような症状があるのでしょうか。今から予防接種を受けたほうがよいのか教えてください。

(山梨県 N)

A

不妊のリスクは低いが難聴が残る 場合も。成人でも予防接種が大切

回答者

笠井耳鼻咽喉科クリニック
自由が丘診療室(東京都)

院長 笠井 創

おたふくかぜ(流行性耳下腺炎、ムンプス)は、ムンプスウイルスによる急性ウイルス性伝染性疾患です。ムンプスウイルスは腺組織と中枢神経系を侵しやすく、腺組織では耳下腺炎や顎下腺炎、すい臓炎、睾丸炎や副睾丸炎、卵巣炎をおこし、中枢神経系では髄膜炎、髄膜脳炎、内耳炎によるムンプス難聴をおこします。両側の耳下腺が腫れることが多いために、おたふくかぜと呼ばれますが、耳下腺が腫れる人は7割くらいです。

睾丸炎や卵巣炎による不妊のリスクはそれほど大きくはないと考えられています。おたふくかぜで耳が聞こえなくなることがあります(ムンプス難聴)。ムンプス難聴はムンプスにかかった人の約1000人に1人くらいの頻度ですが、治療による改善が期待できないために後遺症として難聴が残ります。片側性の難聴だけでも方向感覚が低下して、日常生活で不便を感じることも多いのですが、まれに両側の高度難聴となることがあります。そうなる

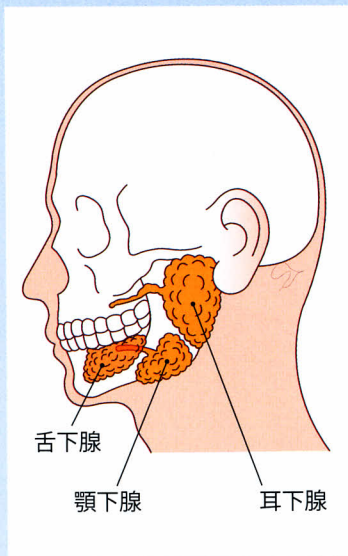
と補聴器や人工内耳を使っても聴力は完全には戻りません。

おたふくかぜは3〜13歳の子どもに多く、次いで30代の子育て世代が多くなっています。とくに予防接種を受けていない学年で大きな流行がおこります。成人でも免疫がなければ罹患し、年長児や成人では症状が強く出ることがあります。

おたふくかぜはかかってしまっただけの根本的な治療法はなく、あくまでも対症療法が主体になりますので、ワクチンによる予防が大切です。日本は先進国で唯一、ムンプスワクチンが定期接種化されていない国です。1989年にMMR(麻しん、ムンプ

ス、風しん)ワクチンが定期接種として導入され、ムンプスの流行が抑制されるようになりました。ところが、MMRの中に含まれるムンプスワクチンによる無菌性髄膜炎の副作用が社会問題となったことで、1993年にMMRワクチン接種は中止となりました。その後、ムンプスワクチンは単独の任意接種となり、予防接種率が30%台に低迷しているためムンプスに免疫のない人が多く、4〜5年ごとに大きな流行をくり返しています。ムンプス難聴を予防できる唯一の方法がワクチン接種です。小児科学会や耳鼻咽喉科学会はムンプスワクチンを任意から定期接種にするように求めています。

おたふくかぜとは



唾液腺には、耳たぶの下にある耳下腺、舌の下にある舌下腺、あごの下にある顎下腺がある。流行性耳下腺炎は、両側の耳下腺に腫れと痛みを伴うことが多く、いわゆるおたふく顔になるため、おたふくかぜとも呼ばれる。